聖霊降臨後第１６主日（特定１８）　　閉塞状況を打破するもの　　２０２４．９．８．

来週の日曜日、９月１５日は、直腸がんのために４５歳で亡くなった、アンデレ末藤秀夫司祭の逝去４２周年の記念日になります。私は神学校の１年生の夏に、直方と飯塚の教会で実習した時、末藤先生はまだお元気でしたが、その翌年の１月に体調を崩して、精密検査の結果、がんであることがわかり、私が２年生の夏にはこの戸畑で実習をした時には、直方の教会の前までは行きましたが、牧師館には、小さな灯が点っているだけでしたので、寄らずに通過しました。そして９月に神学校の授業が再開された頃、電話で末藤司祭が亡くなったことを聞かされました。

末藤先生は、闘病生活をされる中で、病床だよりに「一番大切なもの」という題の手紙を書いておられました。亡くなった１９８２年９月の教区報に載せられていました。改めて読み直してみると、４５歳で亡くなった、末藤先生が、病気と向かいあって、いろんなことを考えられ、重要なことを私たちに残してくださっていることを改めて気づかされました。

特にその中でも、私の心に残ったのは、「心のふれあい」という言葉でした。手紙を引用します。

『私たちは人間である以上、その存在をどんなに弱い時も受け入れてもらい、心のふれあいがあるならどんな苦しみにも耐えて生きていく希望がわいてくるものです。今、社会のいろいろな非行の問題らはお互いの存在が認められていないところから、みな起ります。能力や知恵は死の前に何ら力も勇気も与えてくれません。』

「心のふれあいがあるならどんな苦しみにも耐えて生きていく希望がわいてくるものです。」とは、先生が勝手に想像しての文章ではないでしょう。毎日痛みを覚えながらも、ちょっとした人のかけてくれた言葉とか、手紙の一文に触れて、今までの閉塞感が、打開されるような経験があったのだろうと思います。

最初、神学生としてこの手紙を読んだ頃は、私には、先生のように病気や悩みを抱えていませんでしたので、十分理解できていなかったのではないか、と思います。そして、司祭になって働いてからも、９月の教区の逝去教役者記念聖餐式の説教をすることになって、同じ言葉を引用しながら説教したと思いますが、私自身は、実感をこめて話すことはできませんでした。

しかし、５０歳を超えて、神学校の教員をしていた時、いろんな環境の変化や、人間関係の悩みで数か月療養生活をしていたことがありました。そんな辛い生活をしていた時、一本の電話。１通の手紙によって、また身近な人のかけてくれた言葉で、とても励まされたことがありましたので、末藤先生の言われたことば、「心のふれあいがあるならどんな苦しみにも耐えて生きていく希望がわいてくるものです。」が実感として伝わってきました。

今日の福音書は、「耳が聞こえず舌の回らない人をいやす」というお話でした。イエス様の所へ障がいを持った人を友人たちが連れてきて、いやしてほしい、とイエス様に頼んだんですね。

当然、その人々と障がいを持った人とは、心だけでなく、いろんなふれあい、関わりがあって、そんな関係から、イエス様のところへ連れてゆこう、ということになったのでしょう。すると、今度はイエス様が、その人を群衆の中から連れ出して、指を両耳に差し入れ、唾をつけてその舌に触られた、とあります。

心のふれあいどころか、たくさんの接触をして、その人の孤独を癒して行ったのではないか、と私は想像します。そして、天を仰いで深く息をつき、決定的な言葉を言われました。
「エッファタ」これは「開け」という意味だと聖書は説明しています。

ある注解書を見ると「「解き放たれよ」の意味.〈もつれも……解け〉「束縛を解く」という意味で用いられている．イエスは，何かに縛られ，何かに閉じ込められているようなこの人に向かって，閉塞的な状態から解放されなさい。」という意味だ、と解説していました。

これを、具体的には、どのように受け止めたらいいのでしょうか。

今日の旧約聖書には、イザヤ書３５章が選ばれていて、
『35:5 そのとき、見えない人の目が開き／聞こえない人の耳が開く。 35:6 そのとき／歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う。荒れ野に水が湧きいで／荒れ地に川が流れる。 35:7 熱した砂地は湖となり／乾いた地は水の湧くところとなる。』

これは、救い主メシアが来た時のしるし、として紹介されているものですが、私たちの日常生活でも、こんなことが、起きるんだろうか、と疑問に思うかもしれません。

数年前のことです。私の母は、体は丈夫なのですが、耳が遠くて、人々の集まりの中に入っていても、ひとりだけ孤独。テレビを見ても、その内容が理解できない、という状況がありました。父の介護をしていた時には、少々の耳が聞こえないことは気にせず、動き回っていましたが、父を見送り、また車の免許も８０歳になった時、「事故もなく止められることが感謝だ。」と言って、車を手放すと、本当に元気がなくなったことがあります。

何とかしなければ、と思い立って、その時は、まだ地デジ放送に、完全には切り替えられていなかったのですが、これはひとつ大きなテレビで、話の内容も、文字放送で観ることができるようにしてやろう、と近くの電気屋さんに頼んで、設置してもらったことがあります。その時、最初は文字放送というのに慣れなかったようでしたが、ニュースやドラマの内容が理解できて、朝の連続ドラマとか、大河ドラマなども見て、楽しむようになったようです。しかしその後はそれも面倒で、読書を楽しんでいました。

わたしたちは、なにか面倒なことが起こると、そこでショックを受けて、どうしようもない、閉塞感に襲われてしまいます。そしてその状態からは逃げ出せない、と考えてしまいやすい。しかし、何らかの方法で、それを克服する道が、人間の知恵でも開けることがあるように思えたのです。特に、教会に行っても、説教が聞こえない、という母に何がしてやれるか、考えましたが、そのころから、毎週自分の作った説教を郵送してやるようになりました。

宗像に住んでいたころから始めた、自分の説教を郵送する、ということを、宮崎に移ってからは、郵送する相手も増えました。また、１年目の信徒総会で、「牧師がいない時に、信徒で礼拝を守り、勧話をするのに、牧師がどんな説教をするのか、事前に読ませてほしい、」という要望があって、そのころから、約１か月先の説教を作って、ホームページにアップしたり、コロナが流行しだした４年前の夏からは、次の１カ月分の説教を前もって郵送するようになりました。現在は戸畑と小倉が中心ですが。

本来、説教というのは、「信徒の人の顔を見ながら話し、原稿にあまりとらわれないもの。」と教えられてきましたが、それでは、聞こえない人がいる。だから、説教は事前に配るし、礼拝に来ることができない人が増えているので、家庭でその日の聖書を読んだりするきっかけにもなると信じて、聖書や聖歌を一緒にした教会カレンダーも付けているのです。

また、私たちの教区には、暑い夏にエアコンのない礼拝堂もあるのですが、そんな場合に、いつも礼拝堂で礼拝しなくても、涼しい所で礼拝を守ることも、決して悪くないように思います。

礼拝は、暑さに耐える「ガマン大会」ではなく、一週間の苦労から解放される時だ、ということから、２階に礼拝堂があっても、そこに行けない人がいるなら、みんな１階で苦労せず、楽しく礼拝をして、悪いはずがないように思うのです。

そんな行動をすることが、「耳が聞こえず舌の回らない人を」いやしたイエス様の弟子として、わたしたちがその道を歩くことになるのだろうと思います。

私の母は、５月に生活していた施設で、脳血栓がおきて、緊急入院。７月末に退院しましたが、言葉をうまく話せない、という状況になりました。しかし、入院中から絵を描くようになった、と聞き、簡単な絵本や、塗り絵のセットなどを送りました。言葉は口に出せなくても、今までのように文章を読んでくれたら、と思ってそれもまた送ることにしました。

何とか私たちが自分の閉塞感を打破することができるように、お互いに喜びを与えられる関係を作ってゆくことが大切ではないか。

今日は４２年前に亡くなった末藤先生の書かれたものを読み直し、私やそして身近な人の話などを例に挙げながら、私たちのできることは何か、考えてみました。